

# 『牟梨曼陀羅呪経』における 初期密教の特徴

大塚 伸 夫

はじめに（初期密教における本経の位置）

初期密教と一口にいても、呉支謙訳『持句神呪経』（大正No.1351、漢訳年代A.D.220-226）、『華積陀羅尼神呪経』（大正No.1356、漢訳年代A.D.220-226）<sup>(1)</sup>、『無量門微密持経』（大正No.1011、漢訳年代A.D.222-253）<sup>(2)</sup>など、最初期の密教経典が漢訳される三世紀前半より、中期密教の『大日経』が成立する七世紀半ばにいたるには、四世紀にもわたる時間の開きがある。この三世紀より七世紀半ばまでを大まかに初期密教時代と考えてみたい。ちなみに上述した最初期の密教経典のうち、『持句神呪経』は、無量華世界の教主十尊如来より伝わった神呪が鬼神より引き起こされる厄難を除くなどと説かれる。『華積陀羅尼神呪経』は、舍利塔の前や形像の前で香華灯を供養してガラニを唱えるならば、悪趣に墮ちることなく、一切の技芸に秀でて無量の智慧を得ると説かれる。『無量門微密持経』は、釈尊が説く如来秘密（ガラニ）の功德によって出世間的な不退転と無上菩提の獲得が強調される。また、阿弥陀如来もこの秘密を持することによって成仏したと説かれる。これら最初期密教の経典は、いずれも真言ガラニに基づく素朴な祈願成就を主とするが、その中でも異色なのは現世利益的な特徴が見られない『無量門微密持経』である。他の経典ではほとんど鬼神や病気、災難からの救済が説かれるのに対して、同経では不退転や無上菩提の獲得をテーマとしているのが注目される。このように最初期の密教経典には、ガラニ唱誦による様々な除災や除障、涅槃や菩提の獲得が説かれ、舍利塔や仏像の前でガラニを唱えるなどの修法が見られた。

そこで『牟梨曼陀羅呪経』であるが、本経は訳者不明のまま梁録に附された経典で、『開元録』にその点が確認されるので<sup>(3)</sup>、少なくとも梁代（A.D.502～557）か、それ以前に漢訳された密教経典といえる。また、本経の梵本に関して、幸いにも五～六世紀ころの書写とされるギルギット所伝の梵文断簡（round-gupta 文字）が報告

されているので<sup>(4)</sup>、インドにおける本経の成立は、漢訳年代より遡ることを考慮すれば、五世紀半ばころには成立していたと推測できる。したがって、本経は時代的にみれば、初期密教時代のちょうど中間に位置することになる。一方、経典に見られる密教的要素からしても、上述した最初期の密教経典には見られなかったマンダラの作壇法・画像法・護摩法が整備され、初めて真言と印契が組み合わせられるなど<sup>(5)</sup>、それまでの密教経典より飛躍的に密教化が進み一大転換を果たしている。それゆえ、本経は時代的にも密教的要素からも、長い初期密教時代を「前期」と「後期」に分けるターニングポイントになり得る重要な経典と位置づけることができる。しかしながら、本経に対する従来の研究はあまり盛んでなく、密教史の展開の中でわずかに言及され始め、近年ではようやく細部が検討されるようになってきた程度である<sup>(6)</sup>。それとて、全体的に本経を捉える観点からすれば十分とはいえない。このような理由から、本稿では、経典を構成する八種の儀軌と、その儀軌に使用される五十六首の真言や、各一種のマンダラと画像を取り上げて、経典の全体的な視点より、初期密教のターニングポイントになり得る『牟梨曼陀羅呪経』の特徴を浮彫りにしてみたい。

## 1 『牟梨曼陀羅呪経』と類本の比較対照

以下に示すように①『牟梨曼陀羅呪経』の類本には、漢訳に②菩提流志訳と③不空訳、他に④チベット訳と⑤梵文断簡がある。そのうち、②菩提流志訳には「雑呪品第六」以降、内容の異なる(a)明本と(b)麗本がある。(a)明本は④チベット訳と⑤梵文断簡に近く、(b)麗本は③不空訳に近い内容となっている。

### <類本>

- ① 失訳『牟梨曼陀羅呪経』一卷（大正No.1007）
- ② 唐菩提流志訳『广大宝楼阁善住秘密陀羅尼経』三卷（大正No.1006）
  - (a) 明本
  - (b) 麗本
- ③ 唐不空訳『大宝広博楼阁善住秘密陀羅尼経』三卷（大正No.1005A）
- ④ 'Phags pa nor bu chen po rgyas pa'i g'zal med khañ śin tu rab tu gnas pa gsañ ba dam pa'i gsañ ba'i cho ga źib mo'i rgyal po źes bya ba'i gzuñs（『聖大宝広大楼閣善住秘密最勝儀軌王と名づける陀羅尼』（デルゲ版No.

506 = 885, 北京版No.138 = 510)、なお福田(1990, p.31)には「建立曼荼羅品第七」に相当するチベット訳は欠落と指摘されるが、デルゲ版には存在する。]

- ⑤ 梵文写本断簡 : Śata-piṭaka Series vol. 10-7, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1974, p.7 ; 松村恒「ギルギット所伝の密教図像文献」『密教図像』第2号、1983、pp.71-79。〔上掲の②(a)明本とよく対応するのでその対応部分を記す：「結壇場品第七」の途中より「画像品第九」の途中(大正vol.19, 651b17-652b22)まで〕

ここで、①『牟梨曼陀羅呪経』を含めた各類本の章品構成を対照してみると、①本経は他の類本に見られるような章立てがなく、すべて散文で説かれる。そのうち、各類本の間で欠落している部分や対応しない部分を中心に見ると、以下のような三点に気づく。

第一に、①本経では最初の部分が欠落している。この欠落部分は、本経の中心テーマとなる〈大宝広大樓閣善住秘密陀羅尼(以下、善住陀羅尼と略称)〉が釈尊によって説かれるまでの因縁譚の部分である。類本の対応箇所であれば、②菩提流志訳(a)(b)本では「序品第一」より「心随心呪品第三」の随心呪(636b8-641a12)まで、③不空訳では「序品第一」より「心及随心陀羅尼品第三」の随心陀羅尼(619b22-624b29)まで、④チベット訳では「第一章」より「第二章」の随心呪(真言No.5、D.286b2-300a3, P.265a2-278a2)までの部分が欠けている。高田(2000、p.2)によれば、この欠落部分は初めから①本経になく、後代の類本の段階で付加されたとみなしているようであるが、筆者はそうではなく、『牟梨曼陀羅呪経』漢訳当初は、この欠落部分は存在していたと考える。その根拠となるのが真言に付された番号なのである。まず全類本を見ると、真言の総数は五十六首を数える。そのうち、①本経には真言No.1とNo.2が欠落しており存在しない。それにもかかわらず、各類本の真言No.6〔類本対応箇所：②菩提流志訳「雜呪品第六」((a)明本649c1, (b)麗本642b11)、③不空訳「諸儀軌陀羅尼品第六」(626a25)、④チベット訳「第二章」(D.303a2, P.280b2)〕に対応する真言が、①本経でも同じ番号で「座呪六(659b24)」と記されているのである。ここに不自然さを感じず。つまり、各類本の最初に説かれる真言No.1と2に対応する真言が、そもそも①本経にないならば、「座呪六」という真言番号が「六」とはならず、「四」であったはずなのである。したがって、①本経の欠落部分に含まれる真言No.1と2が初めから①本経に存在したからこそ、この「座呪」の番号は「四」ではなく、「六」となり得たのである。この点からすると、①本経には漢

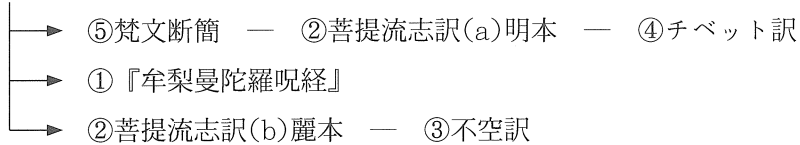
訳当初から真言No. 1と2を含む巻頭部分が存在していたという結論に達するのである。以上の点から、各類本に対応する本經の巻頭部分は、いつの時代か何らかの理由で欠落してしまったと考える。それ故、『牟梨曼陀羅呪經』が漢訳された当初には、この最初の部分が存在し、原典にも存在していたと考えられる<sup>(7)</sup>。

第二に、①本經には各類本とまったく対応しない部分が一箇所ある。その場所は、①本經ではすでに護摩法について説かれ終わっているのに(663b16-664a2)、何故かもう一度、画像法が説かれた後にその内容が詳述され繰り返されている部分がある(664c1-667a24)。本来ならば、この部分は經典の最後の部分になるのである。②菩提流志訳(a)明本では「火祭品第十」の最後(653a29-c4)に相当し、(b)麗本では「護摩品第九」の最後(645a22-b25)、③不空訳では「護摩品第九」の最後(629b13-c20)、④チベット訳では「第七章・儀軌の讚歎と積尊の娑婆世界への帰還」を内容とする、經典最後の部分(D.303a2, P.280b2)なのである。つまり、①本經では經典としての最後の部分がないかわりに、護摩法が詳しく再説されているのである。

第三に、①本經の特色となる十七印明の結印法についてである。まず、全類本には十七の印明が説かれるが、詳細な印契の結び方(結印法)が示されるのは①本經(661a26-663b15)、②菩提流志訳(a)明本「手印品第十二」(654a19-657c6)、(b)麗本「印法品第十」(646b1-649a20)、③不空訳「護摩品第九之餘」(631a1-634b5)の四本であり、④チベット訳、⑤梵文断簡の二本には結印法が見られない。とくに②(a)明本、(b)麗本の相当箇所は再説部分にあたり、わざわざ結印法を詳説するために増広された部分である。この結印法は、印契と真言が密教史上初めて本經において組み合わせられた証左となるもの故に、密教史における本經の位置を確定する場合、非常に重要なものとなる。それが本經の古層となる⑤梵文断簡に見られないということは、おそらく、上記の漢訳四本に見られる詳細な結印法は、漢訳者に伝承されたものを補足説明するために付加されたのではないかと思われる。

以上の大きな相違三点を除けば、漢訳諸本と④チベット訳との間には章品の異同があるものの、内容的には対応している。一方、⑤梵文断簡に関しては、松村(1983a, pp.72-73)に報告されるように、チベット訳とも対応するが、それ以上に②菩提流志訳(a)明本とよく対応する。また、(a)明本については、最後の「普光心印品第十一」と「手印品第十二」の両品が「手印呪品第八」を増広して再説されているが、この両品を除けば、章品構成も含めてチベット訳とも対応する。そこで、これらの比較対照を通じて全類本を系統別に整理してみると、以下のような三系統に分けられるようである。

原『牟梨曼陀羅呪経』



## 2 第一章の内容構成とその果たす役割

それでは、本経の全体像を概観してみたい。その場合、①『牟梨曼陀羅呪経』には、上述のとおり欠落部分や乱脱があるため、原『牟梨曼陀羅呪経』を想定するには困難をとまなうので、年代的に最も古い梵文断簡とよく対応する②菩提流志訳(a)明本と④チベット訳から、本経の全体的な内容を概観することにしたい。

まず、第一章〔②菩提流志訳(a)明本「序品第一」、④チベット訳「第一章（警覚章、第一儀軌）」〕では、釈尊が八種の儀軌を主内容とする「第二章」以降を説法するまでの因縁譚が説かれる。その因縁譚はジャータカの要素を含みながら、以下の六つのストーリーで展開する。

(1) 釈尊とその集会者たちが住する王舎城が魔軍に埋め尽くされてしまうのだが、釈尊が大地を加持して、魔軍とすべての外道を降伏してしまう。その時、王舎城にある四辻に千葉の七宝蓮華が出現する。すると、その蓮華より「警覚ガラニ（真言No.1）」が発せられる。

(2) そこで、集会者の一人である金剛手が、釈尊になぜこのガラニが蓮華より発せられたのか質問する。釈尊は答えて、〈善住ガラニ（真言No.3）〉の存在を教え、このガラニの力で魔軍は滅び、群生を利益し、四辻に蓮華が出現したと説明する。その一方で、このガラニがなければ釈尊自身も現等覚できず、このガラニの修行に精進したから仏陀になり得たと説明する。そして、このガラニこそ法性真如を覚える身体を成就するものであると説かれる。

(3) 次に、釈尊がこのガラニの因縁譚を語る。まず、はるか東方に「大宝賢種々善住清浄如来」が住する「宝灯世界」があって、その世界はすべてが厳浄されており、人々も三宝を信仰して安楽である、とその世界の様子が語られる。そして、そのような素晴らしい世界を形成できたのも、みながこのガラニを受持した結果であるとし、彼の如来もかつて菩薩であった時、このガラニを成就して仏陀になられたと説明される。そして、あらゆる罪を犯した者も、このガラニを受持すれば、不退転になると強調される。

(4) 釈尊がこのガラニの説明を終えると、その時、釈尊の面前にすべての天界を輝かす七宝楼閣が出現する。と同時に、釈尊の眉間より光明が発せられ、十方の諸仏を警覚する。そこで、十方の諸仏は釈尊に対して、宝灯世界の「大宝賢種々善住清浄如来」のもとに赴き、〈善住ガラニ〉を広めるよう奮起させよと勧請する。それによって、釈尊は集会者とともに娑婆世界から宝灯世界へ移るが、彼の如来より二度目の転法輪を行うよう依頼される（これは、釈尊が第二章以降でガラニやマンダラ、画像を含む儀軌を説くことを暗示している）。その後、宝灯世界における彼の如来が十方世界を警覚する光明を発すると、十方の諸仏がその集会に集まる。

(5) ここに十方諸仏や菩薩を始めとする大集会輪が完成するのであるが、その中から「宝蔵菩薩」が代表して彼の如来に〈善住ガラニ〉を説くよう懇請するが、結局、彼の如来は釈尊に説くよう依頼する。釈尊はその依頼を受けて、金剛手に地面を金剛杵で打たせると、その場に仏塔を中央に安置させた七宝楼閣が出現する（この仏塔出現のモチーフは高田（2000、pp.8-11）で既に指摘されたように『法華経』見宝塔品に求められよう）。その仏塔の中には「花幢宝王」「種々宝」「金剛聖王」という三如来がいて、空中には金文字の〈善住ガラニ〉が書かれていた。

(6) そこで、釈尊が三如来の招きで仏塔の中へ入り、三如来と共に坐ると（このモチーフも上記『法華経』見宝塔品に求められる）、ジャータカ的手法でこの三如来の前生譚を説き始める。それは、この三如来が前生に仙人であったころより、〈善住ガラニ〉を得て仏陀となるまでの過程である。そこで、釈尊は諸仏の勧めによって、「警覚心真言（真言No.2）」を説き、すべての集会者から供養を受けると、その中央に千幅金輪を載せた千葉の七宝蓮華が出現する。すると、その千幅金輪の中から、釈尊に対して〈善住ガラニ〉を説くよう声が発せられる。その要請を受けた釈尊は、第二章より以降、本経の柱となる〈善住ガラニ（真言No.3）〉、マンダラ、画像などを説き始める。

以上が第一章の概要であるが、ここには第二章以降に説かれる本経の核となるものに、以下のような意味づけがなされていたといえる。

1. 〈善住ガラニ〉は、過去の如来たちが等しく成就したもので、宝灯世界の如来も釈尊も同じくこのガラニによって成仏されたと説かれることによって、〈善住ガラニ〉の功德力を保証する演出がなされている。
2. 〈善住ガラニ〉に基づく儀軌については、行者がこのガラニに基づく儀軌を実践すれば、釈尊のみならず過去の諸如来と同様に成仏できる、権威ある儀軌として保証されている。

3. 仏塔・七宝蓮華の楼閣・千輻金輪・説法の会場である集会輪などについては、そのまま第二章以降に説かれるマンダラと画像のモデルとなって、儀軌の世界観を構築する重要なモチーフを提供している。

このように第一章では、後述するガラニや儀軌、マンダラ、画像が行者に成仏させる効力あるものとして保証する演出がなされていたといえる。

### 3 第二章以降に説かれる儀軌の構成について

第二章〔②菩提流志訳(a)明本「根本呪品第二」～「雜呪品第六」、④チベット訳「広大明呪成就章、第二儀軌」〕では、四種の儀軌とその得益が明かされる。まず、釈尊は四種の儀軌を行うのに必要な真言三首を説く。第一の真言が一切の罪障を除く「根本呪、善住ガラニ（真言No.3）」である。釈尊がこのガラニを説くと、一切の諸仏が釈尊に対して、菩提道場にいたるこのようなガラニをよく説いたと称賛する。そして、諸仏がこのガラニは功德が絶大であり、唱えれば不退転となり無上正覚者になると、このガラニの功德力を保証する。続いて、釈尊が「心呪（真言No.4 : om maṇivajre hūṃ)<sup>(8)</sup>」と「随心呪（真言No.5 : om maṇidhari hūṃ phaṭ）」を説き、直後に以下の四種の儀軌が明かされる。

#### (1)根本呪（真言No.3）儀軌と祈雨法（②本「心随心呪法品第三」）

まず、本経において最初に説かれる第一の儀軌は、「根本呪儀軌（①本「牟梨曼陀羅」、②本「根本呪」、③本「根本陀羅尼」、④本「rtsa ba'i rig snags kyi cho ga」）」と呼ばれる。これは、類本の経題にもなっている「大宝広大樓閣善住秘密ガラニ（真言No.3）」を唱える念誦儀軌である<sup>(9)</sup>。まず、念誦する場所は舍利塔の前と規定される。そして、この儀軌は吉祥日を選定することも、斎戒も必要としないとされる。その次第をみると、

- a 白月の八日より十五日まで、＜善住ガラニ（真言No.3）＞をただひたすら一万遍唱える。
- b 第十五日になると沐浴し、浄衣を着て、舍利塔に供物・四灯明・香華を供養する。
- c 三白食を食する。
- d 舍利塔〔とマンダラ〕の周囲を百八遍巡る。
- e 先の＜善住ガラニ＞を再び百八遍唱える。

f 就寝する(これによって朝方には如来と金剛手を見仏するという)。

g 翌朝に再び〈善住ダラニ〉を百八遍唱える。

この次第には、舍利塔の前で塔に供養したり、塔〔とマンダラ(マンダラは①本經のみに指示<sup>(10)</sup>)〕の周囲を巡る所作があることから、この根本呪儀軌は仏塔儀礼の形態をもつ特徴がある。このような特徴については後述するが、本經の成立を考えると重要な意味を持つことになる。ともかく、これを如法に修すれば、水・火・盜賊などのあらゆる災難や、身体に関するあらゆる病氣、蛇や悪鬼の恐怖もすべて消え失せるという。そして、一切の恐怖や罪障が除かれ、一切の功德が成就されて、六波羅蜜を円満し、如来の真実を成就すると説かれる。また、舍利塔以外にも山頂・天廟・龍の住处(池、沼)・金剛手の前などを修行場所を選定して同儀軌を行うことも説かれる。

次に、同ダラニに基づく祈雨法も説かれる。それは、干魃の時、三つの頭がある龍の像を造り、そこに四つの満瓶と四香炉を安置し、牛糞で壇を造り、五色線で周囲を结界して、焼香・飲食・果実・花などを供養して、同ダラニを千八遍唱えながら、龍の頭に白芥子を投ずるといふものである。これによって、龍が服従して雨を降らせるというのである。

## (2)心呪(真言No.4)儀軌と雄黄法(②本「持心呪法品第四」)

次に、先の「心呪(真言No.4)」を唱える第二の念誦儀軌が説かれる。ここでは、先の(1)根本呪儀軌のように具体的な次第が説かれず、ただその得益のみが明かされる。おそらく、この次第も先の儀軌と同じ内容で行われるゆえに省略されたと思われる。得益については、五無間罪を犯した者でも罪障が除かれ、最終的には一切如来による灌頂を受け、一切如来と同会できるとされる。

さらに、同心呪による世間的な成就法の「雄黄法(①本「斛他蘇乾得」、②本「雄黄法」、③本「雄黄」、④本「l doñ ros la bsgrub pa」)」が説かれる。これは、仏陀の前で白月の十三日より十五日の三日間で行われる。おおよその次第をみると、

a 沐浴し、浄衣を着る。

b 三白食を食する。

c 雄黄を銅器に入れて、仏陀の前で三日間にわたって心呪を十万遍唱える。

これにより、銅器の中の雄黄が黒く焦げれば、それを額につけることによって隱身を成就するとされる。次に、雄黄から煙が出れば、それを目に塗ることによって一切の菩薩や金剛手の住处を拝見できるとされる。次に、雄黄が光り輝くならば、



持明者は虚空を遊歩し、燃灯ドラニ三昧を得て、一切諸天の主になる、という三種悉地を成就するとされる（この種の三種悉地は『蘇婆呼童子經』にも見られる<sup>(11)</sup>）。

また、山頂や湖における場合も示され、最後に様々な香薬を入れた瓶水に対してこの心呪を一万遍唱えて、その瓶水で重病人を洗浄すれば、すべての病気が癒されるという儀軌も説かれる（この儀軌もやはり『蘇婆呼童子經』に見られるが、そこでは「除難灌頂」という灌頂儀軌で説かれる<sup>(12)</sup>）。

### (3) 随心呪（真言No.5）儀軌（②本「誦随心呪法品第五」）

次に、先の「随心呪（真言No.5）」に基づく第三の念誦儀軌が説かれる。ここでも具体的な次第は説かれませんが、おそらく、先の第一の儀軌と同じように行われると思われる。そして、その得益は十万遍唱えるならば、鬼魅や毘那夜迦、一切諸天や龍などを服従させ、望みのままに呼び寄せることができるとされる。そして、最後には一切如来に護念され、不退転となって無上菩提を証する、と如来に印可されると説かれる。

### (4) 供養法的儀軌（②本「雜呪品第六」）

このち、「座真言（真言No.6）」より「發遣真言（真言No.37）」までの三十二首を順に唱える第四の儀軌が説かれる。この儀軌については、藏・漢四訳を通じて何の儀軌名も与えられず、どのような場合に行われるのか明示されない。しかしながら、①『牟梨曼陀羅呪經』だけには「前の三呪（すなわち真言No.3、4、5）に依て作法し畢已て、其の一一に随て之を持さんと欲わば、要ず當に先ず誦すること八百遍を満たすべし（660c21-22）」とあることから、儀軌の流れを考えると、前述した第一の根本呪儀軌、第二の心呪儀軌、第三の随心呪儀軌を行った後に、三十二首の真言からなる第四の儀軌を行うと考えられる。

そこで、三十二首の真言を内容別に分類して、その真言名を列举してみると、「結界分」以下の六つの構造をもつ儀軌であったことがわかる。

- |         |                                    |
|---------|------------------------------------|
| 《結界分》   | 1 真言No.6：坐壇呪（④チベット訳「座真言」）          |
|         | 2 真言No.7：結界呪（④チベット訳「マンダラ [結界] 真言」） |
|         | 3 真言No.8：結十方界呪（④チベット訳「四方結真言」）      |
|         | 4 真言No.9：縛毘那夜迦呪（④チベット訳「縛毘那夜迦真言」）   |
| 《護身淨潔分》 | 5 真言No.10：結護身呪（④チベット訳「結頭髻真言」）      |

- 6 真言No.11：結浄衣呪(④チベット訳「衣真言」)
- 7 真言No.12：洗手呪(④チベット訳「洗浄真言」)
- 8 真言No.13：洗浴呪(④チベット訳「洗浄真言」)
- 9 真言No.14：灑水及灑衣呪(④チベット訳「洒水真言」)
- 10 真言No.15：氈線呪(④チベット訳「紐真言」)
- 《供養分》 11 真言No.16：散華呪(④チベット訳「華真言」)
- 12 真言No.17：塗香呪(④チベット訳「香真言」)
- 13 真言No.18：焼香呪(④チベット訳「焼香真言」)
- 14 真言No.19：然灯呪(④チベット訳「灯明真言」)
- 15 真言No.20：壇外一切天神鬼等食祭祀食呪(④チベット訳「飲食真言」)
- 16 真言No.21：供養遏迦呪(④チベット訳「闕伽真言」)
- 17 真言No.22：献佛食呪(④チベット訳「供物真言」)
- 18 真言No.23：献火食呪(④チベット訳「護摩真言」)
- 19 真言No.24：把数珠呪(④チベット訳「念珠加持真言」)
- 20 真言No.25：結跏趺坐呪(④チベット訳「座真言」)
- 21 真言No.26：念誦呪持呪(④チベット訳「念誦真言」)
- 《警覚召請分》 22 真言No.27：啓告諸仏願知呪(④チベット訳「一切如来警覚真言」)
- 23 真言No.28：請一切諸仏呪(④チベット訳「召請真言」)
- 24 真言No.29：求請一切菩薩願呪(④チベット訳「勸請真言」)
- 25 真言No.30：求請菩薩眷属呪(④チベット訳「諸菩薩勸請真言」)
- 26 真言No.31：追一切諸天及龍呪(④チベット訳「一切天龍召請真言」)
- 27 真言No.32：請追一切諸天及四大王呪(④チベット訳「四大王召請真言」)
- 《結護分》 28 真言No.33：侍者呪(④チベット訳「弟子真言」)
- 29 真言No.34：入壇場呪(④チベット訳「入[マンガラ]真言」)
- 30 真言No.35：一切祭祀呪(④チベット訳「一切悉知真言」)
- 31 真言No.36：護身呪(④チベット訳「結護真言」)
- 《發遣分》 32 真言No.37：發遣諸天呪(④チベット訳「發遣真言」)

これらの内容を見ると、そこに壇(マンガラ)や結界、召請などの用語が見られ

るので、この儀軌が壇（マンダラ）を想定した儀軌であることが知られる。つまり、壇（マンダラ）を想定して持明者を取り巻く場を結界し（結界分）、持明者の護身と浄化が行われ（護身浄潔分）、マンダラ諸尊に対して香華灯を供養し（供養分）、諸尊を警覚して壇（マンダラ）に召請した上で（警覚召請分）、弟子や持明者自身の加護を祈念して（結護分）、最後に諸尊を発遣する（発遣分）という一連の供養法の構成をとっていたことがわかる。そこで、この第四の儀軌が、第一より第三の念誦儀軌に引き続いて、舍利塔やマンダラの前で行われる状況を考えてみると、この儀軌は、眼前にある舍利塔を第一章所説の「釈尊が住する七宝楼閣の仏塔」に見立て、塔の周囲を「釈尊の大集会輪」を意味する壇（マンダラ）に見立てているといえる。したがって、この儀軌は、舍利塔をめぐる環境を第一章に説くマンダラ世界に見立てて、その上で諸尊に対して供養するという、供養法的な儀軌であったといえる。これまでの最初期密教の経典は、ただダラニを唱えるのみであったが、ここに初めて供養法的な儀軌が登場してきたといえる。これも①本経の大きな特徴といえる。加えて、この儀軌は『蘇悉地羯羅經』『蘇悉地羯羅供養法』所説の儀軌の構造とも類似しているので<sup>(13)</sup>、後代に定型化してくる儀軌の原型であったともいえる。

#### （5）マンダラの作壇法と入壇儀軌

第三章〔②菩提流志訳(a)明本「結壇場品第七」、④チベット訳「曼荼羅儀軌成就章、第三儀軌」〕では、マンダラの作壇法と第五の入壇儀軌が説かれる。まず、作壇法については内院・外院の二重構造をとり、方形であるが、「勝地」と記されるのみで、どのような場所で造壇されるのか示されないまま、作壇法の説明に入っている。おそらく、前述した四種の儀軌が舍利塔とマンダラの前で行うよう指示されていた故に、このマンダラは舍利塔の前に造壇されると考える。そして、規模は各類本とも内院が二肘量（約92cm）とされ、外院は①本経が十四肘量（約6.44m）、②(a)(b)本と③本が四肘量（約1.84m）と指示している。おそらく内院の規模を考慮すれば、外院は四肘量と思われる。そこで、この作壇法の次第を以下に示せば次のようになる。

#### 《作壇法》

- a 扱地する。
- b 五色の顔料で、マンダラと四門を作画する。
- c マンダラ中央に白檀香を塗り、ウコン香を供える。

- d 内院の大きさを二肘量とする。
- e 外院を方形にかたどる。
- f マンダラの中心部分に、七宝楼閣、七色の蓮華座を配し、仏陀を描く。
- g 楼閣の前に蓮華を置き、その上に千輻金輪を安置する。
- h マンダラ中央の楼閣の前に供物を供える台座を安置する。
- i 四門に傘蓋、幢、幡を飾る。
- j 仏陀の左辺には忿怒相の金剛手が、扠子と武器をもつのを描く。
- k 仏陀の右辺には宝金剛菩薩があらゆる装身具で身を飾り、宝珠と扠子をもつのを描く。
- l 四隅には四大王が甲冑を着て、荒々しい形相をしているのを描く。
- m 四隅の四地点に香水や牛乳を満たした器を安置する。
- n マンダラの右辺には大吉祥天女、左辺には餉棄尼天女、門の中央には八臂の金剛使者女を描く。
- o マンダラ中心の四方に繪綵をかけ、四瓶、三十二灯明、果実、華を安置する。
- p 仏陀には金瓶、マンダラの中心には銀瓶を安置し、金剛手以下の尊格に焼香し、飲食を供える。
- q マンダラ外院に四門を置き、東門には眷属を伴った毘紐、南門には大自在天、西門には花齒夜叉女、北門には七侍女を伴った毘摩天女を描く。
- r マンダラ外輪には櫛を打ち、五色線を結びつけ、周囲を囲む。
- s 四隅には五色旗を飾り、飲食、花を飾る。
- t さらに七皿、三十二の素焼きの壺、三十二の粉器、三十二香炉、百八灯明、百八華鬘を安置し、焼香する。

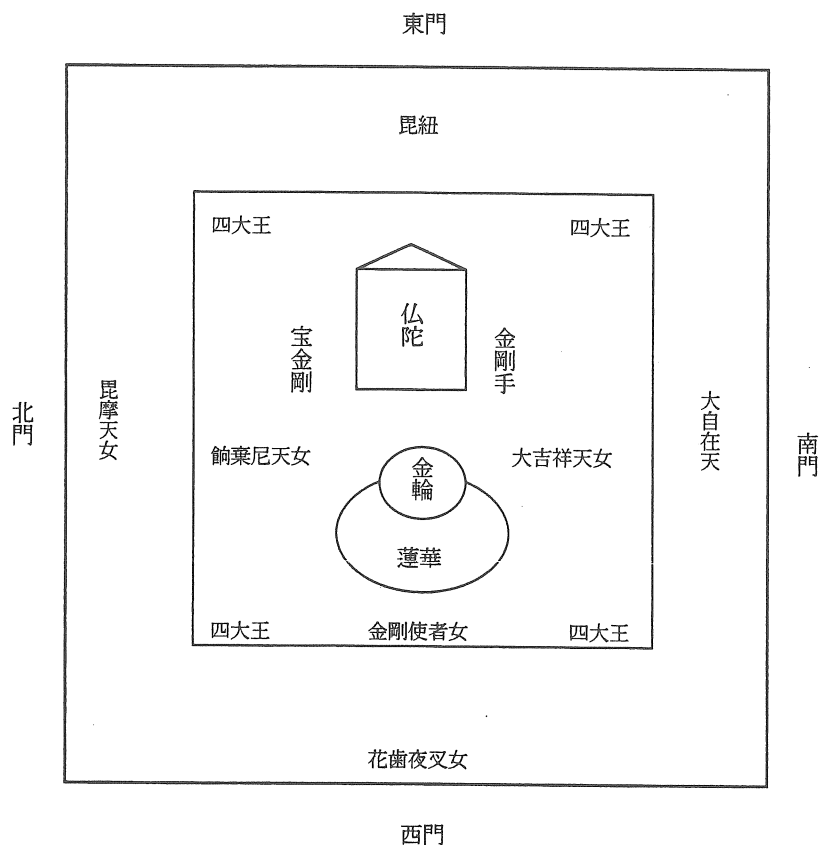
この作壇法よりマンダラ諸尊を抽出して図示すれば次頁のマンダラのようなになる。ここで注目したいのは、仏陀の左右に金剛手と宝金剛が配されている点である。これは、松長(1981、P. 119)によれば、三尊形式の始まりとみなされている。

次に入壇儀軌であるが、次第は以下の如くである。

#### 《入壇儀軌》

- a 作壇し終えたマンダラの入り口となる西門の両脇に、二瓶とある限りの供物を安置する。
- b 西門に用意した瓶水を灌頂真言(真言No.38:①本「香水自灑潔淨呪」、②(a)

《マンダラの構造》



本「入道場呪」、(b)本「此呪加持灌頂瓶水」、③本「灌頂真言」を唱えて加持し、その瓶水を供物に洒水し、また自ら灌頂する。

c マンダラ内に入る。

これが入壇儀軌の全体であるが、このように灌頂し入壇するだけで、菩提道場に達すると得益が述べられる。

(6) 召請儀軌

次に、第四章〔②菩提流志訳(a)明本「手印呪品第八」、④チベット訳「廣大印章、第四儀軌」〕では、十七種の印・明が説かれる。①本経と②(a)明本以外の三訳には、どのような場合に十七印明が結誦されるのか明らかにされていない。そこで、①本と②(a)明本を見ると、マンダラ内で諸印明を結誦して召請を行うよう指示されている<sup>(14)</sup>。ちなみに、⑤梵文断簡より十七印明の内容をみると、以下のようになる。

《十七印明によって構成される召請儀軌》

- 1 真言No.39 : 如来心真言印
- 2 真言No.40 : 如来三昧耶 [心真言] 印
- 3 真言No.41 : 如来慰安 [心真言] 印
- 4 真言No.42 : 如来加持 [心真言] 印
- 5 真言No.43 : 如来金剛獅子座 [心真言] 印
- 6 真言No.44 : 如来灌頂 [心真言] 印
- 7 真言No.45 : 法輪 [心真言] 印
- 8 真言No.46 : 無能勝 [心真言] 印
- 9 真言No.47 : 如来轉輪 [心真言] 印
- 10 真言No.48 : 聖金剛宝 (Tib.聖金剛手) [心真言] 印
- 11 真言No.49 : 如意宝珠印、聖金剛 [心真言] 印
- 12 真言No.50 : 四大王 [心真言] 印
- 13 真言No.51 : 吉祥大天女 [心真言] 印
- 14 真言No.52 : 餉棄尼祈克 [心真言] 印
- 15 真言No.53 : 使者女 [心真言] 印
- 16 真言No.54 : 召請 [心真言] 印
- 17 真言No.55 : 蓮華 [心真言] 印

上記の中にはマンダラ諸尊の印明が説かれた後に、16番目に一切諸尊を召請する印明が説かれているので、①本経や②(a)明本の説明も加味すれば、これらの印明は、先に造壇したマンダラに諸尊を招く「召請儀軌」を構成していたことがわかる。それ故、両訳の指示に従えば、マンダラを造壇し終えると、灌頂などの入壇儀軌を行って入壇し、そしてマンダラ内で今の召請儀軌が行われる次第構成をとっていたといえる。

(7)画像の作画法と画像成就法

第五章〔②菩提流志訳(a)明本「画像品第九」、④チベット訳「廣大画像章、第五儀軌」〕では、画像の作画法とその画像に基づく第七の成就法の儀軌が説かれる。

まず、作画法については、画像の大きさは①『牟梨曼陀羅呪經』には指示がなく、②菩提流志訳(a)明本・(b)麗本では、一肘量より七肘量までを指示し、③不空訳・

④チベット訳・⑤梵本では、一肘量か二肘量を指示する。また、この画像は絵師が描くよう指示されている。尊格の上では諸天と天女の一部に相違が見られるものの、先のマンダラとほぼ同一の尊格が描かれる。ただし、尊格の位置関係がマンダラの場合と正反対になっており、尊格の形相もマンダラの場合と異なり、多面多臂像となっている。これは、松長（1981、P. 119）によれば、多面多臂像の初見とされる。以下にその画像の様態を再現してみたい。

#### 《画像の作画法》

- a 楼閣の中で蓮華の上に坐って説法する姿で、あらゆる装身具で飾られている世尊を画く。
- b 世尊の右辺には金剛手で、四面十二臂の形相をとり、蓮華の上に半跏坐で坐っている（マンダラでは右辺は宝金剛であり、二臂であった）。
- c 世尊の左辺には宝金剛菩薩で、四面十六臂の形相をとり、蓮華座に半跏坐で坐っている（マンダラでは左辺は忿怒相の金剛手であり、二臂であった）。
- d 宝金剛の下には餉棄尼天女で、八臂である（マンダラと比較すると、上記の金剛手と宝金剛が入れ替わるために、以下の尊格もマンダラと異なり、位置を替えることになる）。
- e 金剛手の下には大吉祥天女が膝をつけ、宝珠の器を世尊に献上している姿である。
- f 大吉祥天女の後ろには使者女で、四臂で武器を持ち微笑んでいる。
- g 餉棄尼天女の後ろには花齒で、白衣を着て花を持つ。
- h 仏陀の前には七宝の八葉蓮華を描き、その上に金輪を描く。
- i その蓮華の前には兜をつけた四大王を描く。
- j その蓮華の前には池があり、様々な宝珠で飾られる。
- k 池の岸辺に「持明者」を描き、手には香炉と花束を持ち、もう一方の手には数珠を持ち、膝をつけている。
- l 楼閣の上空では梵天・毘紐・大自在天が様々な花を供養している。

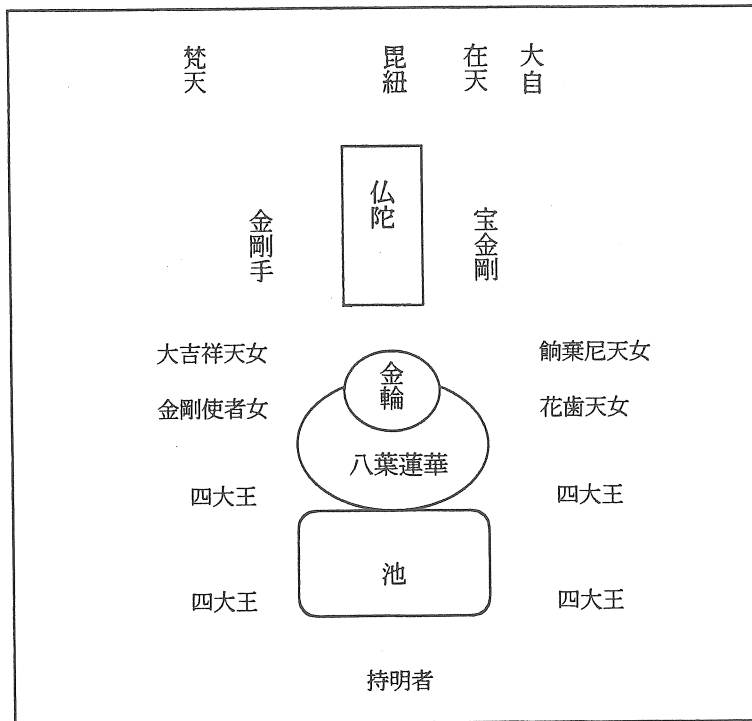
以上の点を図示すると次頁のようになる。

#### 《画像成就法》

次に画像に基づく画像成就法の儀軌である。次頁の図のような画像を前にして、

- a 持明者は白衣を着る。

《画像の構造》



- b 三白食を食する。
- c 画像の前で白月の八日より十五日まで明呪を十万遍唱える。

これが画像成就法の内容である。ここではどのような明呪を誦するか指示されないが、恐らく、本経の重要な明呪である根本呪〈善住ダラニ（真言No.3）〉を十万遍唱えると思われる。また、ここでも上述した(4)供養法的儀軌を行うと考える。本経ではこの説明の後に、この儀軌を修した場合の得益が説かれる。その一例を挙げると、貪・瞋・癡の煩惱を断じ、一切の福德を得て、一切如来に加持されて、供養に値する者になるとされる。さらには如来に授記され、母胎の中に生ずることなく、菩提道場に至るまでを究竟円満するとされる。

(8)三種護摩儀軌

第六章〔②菩提流志訳(a)明本「火祭品第十」、④チベット訳「廣大護摩成就章、第六儀軌」〕では、第八となる三種護摩法の儀軌が説かれる。その場合、①『牟梨曼陀羅呪経』では護摩壇の作壇法が詳述されるのであるが、他の類本にはそのような記述が見られない。



まず、基本的な所作は、護摩真言（真言No.56）を千八遍唱えつつ、様々な護摩供を火中に投じて護摩法を修する。そして、護摩供の組み合わせによって様々なことが成就されると説かれる。例えば、胡麻・白芥子・蘇油の組み合わせでは、一切の作障者や毘那夜迦を降伏し、一切の罪障や厄難、侵略者などを抑え込むとされる。いわゆる降伏法である。次に、安息香・白芥子・蘇油の場合では、一切の鬼魅や部多鬼から免れ、病気から逃れるとされる。いわゆる息災法である。その他にも、様々な護摩供の組み合わせが列挙されるが、最後にあたって、護摩の事業によって一切有情に安楽を与え、財宝を与えると説かれる。いわゆる増益法である。ここに息災・増益・降伏の三種護摩法が説かれていたといえる。

ちなみに、最後の第七章〔②菩提流志訳(a)明本「火祭品第十」の後半、④チベット訳「聖大宝広大樓閣善住最勝秘密儀軌王章、第七儀軌」〕では、儀軌や成就法は説かれず、おもに前説された八種の儀軌が最勝であり、菩提道場に至るものであり、一切如来の最秘密であると強調され、一切有情の煩惱や罪障を滅するものであると説かれる。最後に釈尊が以上のような内容を説き終えると、宝灯世界より娑婆世界に帰還することで、本経が終了する。

以上が本経における全儀軌の内容であったわけであるが、ここで八種の儀軌とダラニ・マンダラ・印契・画像がどのように関連していたかをまとめてみると、

1. 舍利塔の前で釈尊の集会輪をモデルとしたマンダラを作壇して、次にマンダラに入壇する第五の入壇儀軌を行い、除障を果たしてそのマンダラに入る。そして、本経の一大特色である十七印明、すなわちマンダラに諸尊を召請するための第六の儀軌を行う、というものであった。ここにマンダラに関わる作壇・入壇・召請という一連の儀軌が構成されていた。
2. 第一・第二・第三の儀軌は、基本的には舍利塔の前、さらには上記の作壇し召請し終えたマンダラの前で、真言No.3・4・5のダラニをそれぞれ唱える念誦儀軌を行う。その次に、真言No.6より37から構成される第四の供養法的儀軌が修される。ここに真言ダラニの念誦行と供養法的儀軌が組み合わせられていた。このように、真言ダラニの念誦行に供養法的儀軌が結びついたところに、密教史上見逃せない本経の特徴があり、これが後代の『蘇悉地羯羅經』へと展開するものと考えられる。
3. 舍利塔以外の山頂などで念誦行が行われる場合、画像を対象として第七の画像成就法の儀軌が修されるが、その儀軌構成としては上記の第一と第四の儀軌構成で行われる。この場合、画像は釈尊の集会輪をモデルとしており、舍利塔

で行うのと同じ価値を持つといえる。

4. 上述した各種の儀軌はどちらかといえば、出世間的な無上菩提を最終目的とする儀軌であったが、本經には世間的な悉地や除災を目的とする儀軌も説かれていた。それが第一の儀軌（真言No.3）に基づく「祈雨法」であり、第二の儀軌（真言No.4）に基づく「雄黄法」であり、第八の「護摩法」であったといえる。

#### 4 大宝広大樓閣善住秘密ダラニの役割

それでは以下より、上述した儀軌や成就法と密接に関連するダラニやマンダラ、画像といった密教的な要素の役割についてしばらく考えてみたい。まず、本經のテーマとなる根本呪<善住ダラニ（真言No.3）>については、④チベット訳によれば以下のように説かれる。

「その時、一切の罪障を除かせる明呪にして、身体の垢染を消滅させる、無上なる仏菩提の儀軌王がよく説かれたのである。

【No. 3】一切如来に帰命し奉る（namaḥ sarvatathāgatānām,） om vipulagarbhe maṇiprabhe thatāgatanirdeśane maṇi maṇi suprabhe vimale sāgaragaṃbhīre hūṃ hūṃ jvāla jvāla buddhaviḷokite guhya-adhiṣṭhitagarbhe svāhā.（オーン、広大なる胎蔵を有せる者よ、宝光ある者よ、如来の教説を有せる者よ、宝珠を有する者よ、宝珠を有する者よ、妙光ある者よ、無垢なる者よ、大海のごとく甚深なる者よ、フーン、フーン、輝かせ、輝かせ、仏陀を觀る者よ、秘密加持を蔵する者よ、スヴァーハー。）

その時、世尊がこの大宝広大樓閣善住秘密〔D.299b〕最勝ダラニを宣説されると、この大地が六種に震動し、宝珠の大雨が降り、花の大雨が降ったのである。…（中略）…その時、一切の諸仏世尊は釈迦牟尼〔如来〕を稱賛して、「釈迦牟尼よ、菩提道場に至るこのようなダラニを説いたとは、善いことである、善いことである。〔このダラニを〕聞いただけで、一切の罪と悪趣は消滅するであろう。このダラニを憶念する者は、一切如来に聖なる衣・焼香・花・香・華鬘・塗香を供養したことになるであろう。〔このダラニを〕読誦するだけで、不退転となり、無上正等覺者となるのである。（D.299a6-b4, P.277a5-b3）」

引用文の冒頭では、このダラニが一切の罪障を除くものであり、無上なる仏菩提の儀軌王とされることからすれば、このダラニはまさに持明者の罪障を除き、無上

菩提を成就させるものといえる。さらに、第一章における釈尊の説明によれば、このダラニはそもそも過去の諸如来が加持したものとされ、それをかつての三仙人が成就し、その果報として、三仙人が「花幢宝王如来」「種々宝如来」「金剛聖王如来」とそれぞれ呼ばれる仏陀になり得たとされる。同じく宝灯世界の「宝賢種々善住清浄如来」も、そして釈尊の場合も、このダラニを成就することによって仏陀になり得たとされる。つまり、このダラニは五無間罪などのいかなる罪を犯した者であろうと、すべての者を成仏へと導く役割をになっているのである。

それでは何故、このダラニによっていかなる者でも無上菩提が得られるというのであろうか。それを解くキーワードは、このダラニが「仏性を成就する根本 (②(a) (b)本「諸佛種」、③本「成佛根本」、④本「sañs rgyas ñid bsgrub pa'i rtsa ba」)」と明かされるところにある。その点はチベット訳に以下のように説かれる。

「ああ、聖者たちよ、[ここに] 大宝広大樓閣善住秘密なるもの [があるが、これ] は過去の諸如来たちが一切有情を利益するために説かれたのである。[これを] 聞くだけで、不退転より無上正等覚 [D.294b] までの過程を獲得するであろう。… (中略) …世尊よ、如来秘密を説く時はまさにこの [時] である。世尊よ、これは仏性 (sañs rgyas ñid) を成就する根本であり、一切の罪障を除くものであり、一切の苦の湖を枯渇させるものであり、輪廻の荒野から出離するものなのである。これは [輪廻の] 大河より救済するものであって [D.299a]、このダラニがあることなくして仏性を成就することはできないのである。 (D.294a6-299a1, P. 272b3-276b8) ]

ここに説かれる「一切の罪障を除き」「仏性」を開眼させるものがこのダラニであるとすれば、このダラニによって無上菩提の獲得が実現されるという事態も納得できる。このように初期密教經典である本經に仏性思想が見られるのは唐突かもしれないが、画像やマンダラの点で本經と類似する構造をもつ梵本『不空羅索神變真言經』にも仏性や如来蔵の語が見られる<sup>(15)</sup>、六世紀ころの成立と考えられる『蘇婆呼童子經』にも自性清浄心の思想が見られる<sup>(16)</sup>。『蘇婆呼童子經』の場合では、衆生の内に本来的に清浄な無垢心の存在が認められ、それが客塵煩惱によって汚され、業を造り輪廻するとされる。そして、輪廻のうちに汚された自心を本来清浄な状態に浄化する念誦行という修道論まで展開されている<sup>(17)</sup>。それ故に、本經が説くダラニの念誦行によって除障され、無上菩提が実現されると説くところに、仏性思想が介在したとしても何ら不思議ではない。むしろ、本經においてそのような仏性思想に基づく密教的修道論が初めて確立された可能性さえある。

ところで、本經所説のこのようなダラニはいったいどこに由来するのであろうか。すでに氏家(1984, pp.29-32)によって明らかにされたように、初期密教經典に説かれるダラニと大乘仏教のダラニ經典のそれとは峻別できないくらい類似するとされ、密教經典所説のダラニは大乘の呪的要素から発展展開したものであるといわれる。筆者も本經のダラニは例外なく、大乘仏教のダラニ經典の流れを受け継いだものとする。中でも『瑜伽論菩薩地』に示されるダラニの呪的な力で衆生の災厄を除くという「呪陀羅尼」や、開悟に導くという「能得菩薩忍陀羅尼」の影響があるものと思われる<sup>(18)</sup>。このようにダラニの視点より大乘から密教への展開を見るとき、従来の見解は、初期の密教經典は除災招福が中心であったが、次第に成仏を目的とする真言ダラニへと純化し、あるいは修法目的が現世利益から成仏へと純化していったとするのが支配的であった。しかし、筆者はそうではなく、すでに三世紀の最初期密教の時代より、除災を説く經典群と、数は少ないが成仏(あるいは涅槃)を目的とする經典が併存していたと考えるのである。例えば、除災招福を説かない前説した呉支謙訳『無量門微密持經』などがその好例となろう。他にも東晋難提訳『請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經』や、本經の場合がその例になるであろう。確かに現世利益的特徴をもつ真言ダラニが、初期密教經典の中では数の上で圧倒的であるが、その中にも成仏を目的とした最初期の密教經典が存在したのも事実である。この事実を例外視して、初期密教經典は現世利益が中心であったと断定してはならないと思うのである。それ故、初期密教經典に説かれるダラニには当初より二つの系統が存在していたと考えたい。いずれもダラニのみを唱える修行内容は共通するが、一つは民間信仰的な除災を主目的とする多くの經典群、もう一つは、大乘仏教のダラニを継承し、除災や除障を条件としながらも、菩提や涅槃を最終目標とする数少ない經典である。もちろん、本經は後者のグループに入ることになる。

## 5 儀軌におけるマンダラと画像の役割

次に、マンダラと画像の役割について検討したい。第三章に説かれるマンダラは方形で、二重構造をとり、外輪の規模は四肘量で、尊格の総数はわずかに十四尊であった。梁代以前に漢訳された密教經典、とくに『大吉義神呪經』にも素朴ながら作壇法が見られるが<sup>(19)</sup>、そこには本經のような三尊形式の形態をもつマンダラはまだ見られない。それ故、五世紀半ばころに成立したと考える本經において、突如として整備されたマンダラが出現した感がある。本經所説のマンダラは、中心部分の

楼阁に釈尊が、左右に金剛手と宝金剛が控え、その前には蓮華上の千輻金輪が、周囲には諸天女と四大王、梵天などの諸天が配されるものであった。そこに宝灯世界の集会輪に初めて現れる千輻金輪が見られるので、このマンダラは宝灯世界における釈尊の集会輪の構造をマンダラに再現させたものといえる。また、マンダラとは別に画像も説かれていた。この画像は尊格の上ではマンダラと大差ないが、尊格の位置が反対となっており、形相が多面多臂で異なっていた。さらに、マンダラには描かれずに画像のみに描かれていた「持明者」の有無が異なる点であった。とはいえ、画像には蓮華上の千輻金輪も描かれるので、この画像もまた、第一章で述べられた宝灯世界における釈尊の集会輪を再現したものであったといえる。したがって、マンダラや画像は、過去の諸仏や釈尊が成就した大宝広大楼閣善住秘密の世界を映像化し、釈尊の集会輪を再現する役割を果たしていたといえる。

しかし、それは単なる釈尊の集会輪の再現ではなかったように思われる。マンダラや画像の中央に、釈尊の標号としてかつて古層の彫像に用いられた卍字と同様に、千輻金輪が描かれたことに注目したい。この千輻金輪は「大宝広大楼閣善住秘密」そのものを象徴したものであり、かつ輪宝 (cakra) でもあることから、このマンダラや画像には、釈尊自身が同ダラニを成就することによって罪障を除き、無上菩提を得て、衆生にこの秘密を転法輪する、説法図の意味も象徴されていたと考えられる。その上、第一章所説の宝灯世界における集会輪の文脈を想起すると、そこには『法華経』見宝塔品に見られる仏塔出現や、釈尊が仏塔内に他の如来とともに同座する内容をモチーフにしていたので、このマンダラや画像の構図は『法華経』見宝塔品の説法図に影響されているとみなし得る。このように本経所説のマンダラや画像を捉えてみると、構図の発想起源は『法華経』見宝塔品の説法図や、仏塔の欄干などに見られる説法図あたりにはあったのではないかと考える。

それでは角度を変えて、このマンダラと画像にそれぞれ付属する儀軌や成就法から、今一度検討を加えてみたい。まず、マンダラに付属する入壇儀軌を取り上げてみたい。この入壇儀軌は、マンダラの入り口となる西門に二個の灌頂瓶を安置し、供物を備えた後に、灌頂真言 (真言No.38) を唱えて瓶水を加持し、その瓶水で供物と自身を灌頂して、マンダラに入るというものであった。この儀軌の流れによれば、灌頂が済んだ後に入壇することになる。通常、初期密教の中でも後期の経典 (とくに『蘇婆呼童子経』『菴呬耶経』『金剛手灌頂タントラ』) でも、中期密教経典 (『大日経』) の中でも、灌頂といえば、入壇した後のマンダラか、その脇の正覚壇で行うのが一般的である。しかし本経の場合はそうではないのである。そして、本経の場合はこ

の灌頂によって一切の罪障が浄化されるという点が強調されているのである。⑤梵文断簡ではそのあたりの事情を次のように説く。

「よく整備されたマンダラを造り、次に入り口の門に従って進み行くと、水で満たされた二つの瓶を安置し、〔Ms. 53b〕また得られた限りの供物を安置して、如法に入〔マンダラ〕儀軌をも修すべきである。その時、このマントラ〔を唱え、〕灌頂してから入るべきである。

【No.38】 om maṇipulasupratīṣṭhitasiddha abhiṣiṅca mām sarvata-thā[ga]tābhīsekai[r] bhara bhara sambhara hūṃ hūṃ. (オーン、宝珠が広大に安住せることを成就せる尊よ、汝は一切如来の灌頂によって我れを灌頂し給え、もたらせ、もたらせ、集まれ、フーン、フーン。)

このようにして灌頂するだけでも、一切の罪障や、前世に生じた業障が浄化されて、一切の清浄さを摂受するのである。一切如来に加持され、一切如来に灌頂され、一切如来に慰安され、〔Ms. 54a〕一切の悉地が現前するのである。〔さらには〕思い、願うことをそのように成し遂げられるのである。一切如来の三昧耶に随入し、一切如来の法性に随い、甚深の法忍を獲得し、菩提道場へ赴くことになるのである。

このようにして初めの最勝なる功徳を獲得するのである。乃至、不退転となり、無上菩提の道を円満するのである。(Ms.53a5-54a5)』

このように見ると、本經における灌頂とは、入壇儀軌の一部に位置づけられ、マンダラに入る際の除障が主たる目的であったことがわかる。そして、除障の結果として無上菩提の獲得が必然的に得られるという内容であったと理解される。このように本經の灌頂を捉えてみると、後代に定型化してくる法王位の受職を意味する灌頂とは明らかに異なるのが理解されよう。それ故に、本經におけるマンダラに与えられた役割は、先にも考察したように釈尊の集会輪を再現した場へ、灌頂という儀礼を通して一切の罪障を除去して参入し、一切如来の加護のもとに無上菩提を獲得しようとする、その聖なる場を提供することにあつたといえる。

次に画像に付属する成就法から画像についての役割を考えてみたい。この成就法は絵師が作画した画像の前で、〈善住ダラニ(真言No.3)〉を十万遍唱えるというものであるが、その得益を④チベット訳より見ると、以下のように列挙される。

「次に、持明者は白衣を着て、三白食を食べ、〔白月の〕八日より十五日の間に、画像の前で持誦すること十万遍を満たすべきである。その時、画像が揺れ動き、自身が光り輝くのを見、〔D.306b〕無障礙の〔智〕眼を得、「浄宝行」と

名づける三昧を得、一切持明者の転輪者となって、一切如来を拝見するであろう。持誦するだけで直ちに、地獄と畜生道より解き放たれ、貪・瞋・癡などのすべての〔煩惱〕を断じ、貪欲の垢を離れ、…（中略）…〔画像を〕見るだけでも、〔真言を〕唱えるだけでも、〔経典を〕読誦するだけでも、これらの功德と利益を取得する故に、〔P.283b〕ましてや余の儀軌を多く修習する者はなおさらである。読誦し、唱え、念誦することに精進し、成就し、印の集まりを成就し、明呪を成就し、〔画〕布を憶持することを成就するその者は、実に如来が話されて、供養に値する者となろう。天・人・阿修羅を伴った世間の者たちに礼拝されるに値する者となろう。その者は如来と等同であるとみなされ、知られ、一切〔D.307a〕如来によって授記が与えられることで、その者は不退転となるので、無上正等覚を確かに授記されるのである。さらに母胎の中に生ずることなく、どの衆生界であれ赴くところ、そこに蓮華より化生すると知られる。さらには、諸如来と離れることなく、また菩薩とも離れることなく、生ずるところがどこであれそのすべてのところで、如来と同会し、菩薩と同会して、菩提道場〔に至るまで〕の間を究竟円満するであろう。（D.306a7-307a3, P.283a 2-b6）」

この引用文を見ると、画像の成就法を修習すれば、煩惱が断じられ、一切の善法や功德が自ら集積されて、一切如来より授記され、最後には菩提道場に達すると明かされている。したがって、マンダラと同じ意味をもつ釈尊の集会輪を再現したこの画像の前で、〈善住ガラニ〉を唱えて、過去の諸如来や釈尊と同様の菩提を得させる、その場を提供することにこの画像の役割があったといえる。

もう一つ大事な点をつけ加えるならば、この画像は一種の観仏三昧の機能を有していたことである。その点は、引用文の最初に「一切如来を拝見するであろう」とあったり、「〔画〕布を憶持することを成就するその者は、実に如来が話されて」とあることからすれば、この画像は見仏を実現する資具の役割を果たしていたといえる。そのために画像の中にわざわざ釈尊に対面するように持明者が描かれたと思われる。したがって、この画像は従来の『般舟三昧経』のような観仏三昧<sup>(20)</sup>よりも、容易に見仏が行える役割を果たしていたといえる。ところで、この画像に関しては後代の『蘇婆呼童子経』にも言及されている。同経は初期密教者にとっての禁戒を主要内容とするが、そのような経典の中にも、念誦行を行う際には修行場所に画像を安置せよと規定されている<sup>(21)</sup>。このことは、当時の密教者が必ず念誦行を始める際には、画像を前にして行う必要があったことを意味している。さらに梵本『不空羅

『索神變真言經』にも、構造的に本經に近い画像とその功德が説かれる<sup>(22)</sup>。その他、定金(1994, pp.76-118)においては、画像を意味するパタの歴史的な展開過程がクシャーン時代よりグプタ時代後半に至るまで明らかにされている。他にも、松村(1983c, pp.227-228)において画像と観仏三昧の関係が論じられている。そもそも、古くより仏教遺跡に残された仏教美術のもつ機能は、宮治(1994, p.28)に指摘されるように、釈尊を追念・想起するためであったわけである。これらの点から、本經の画像について補足すれば、本經成立当時にはすでに観仏三昧に影響されて展開してきた礼拝用の画像が、念誦用の画像として定着してきたことにより、観念による観仏三昧よりも、さらにリアルに見仏できるよう図像化した画像を前にして、本經を成立させた初期密教者が無上菩提を求めて盛んに念誦行を行っていたであろうことが予想される。そして、次の段階として、このような画像を用いた成就法が『不空羅索神變真言經』や『蘇婆呼童子經』へと継承されていったと考える。

## 6 諸儀軌の得益から見た実践目的の特徴

それでは次に、上述した(1)より(8)に至る八種の儀軌や成就法による得益から、実践目的の特徴を導き出す検討を加えてみたい。まずそれらの得益を見ると、除災や除障と、無上菩提の獲得という二点に集中していた。中心となる儀軌や成就法に的を絞って得益をあげてみると、

(1)第一(真言No.3)の儀軌では、舍利塔の前で修習することで、水や火や盜賊などによるあらゆる災難や、身体のある部分に関する病氣、蛇や悪鬼による恐怖もすべて消え失せ、一切の恐怖や罪障が除かれ、一切の功德が成就されて、六波羅蜜を円満し、如来の真実を成就するといわれていた。これが第一の儀軌による得益であるが、ここで注意したいのは、得益が除災より除障、そして菩提獲得へと次第して説かれる特徴が見られる点である。

次に仏塔に関する点である。この儀軌が修されるところには、実際に供養物が捧げられ、仏塔を巡る作法も行われていた。さらには供養法的儀軌も修されていたわけである。これは、明らかに大乘仏教時代に顕著となった仏塔儀礼の上に、新たな供養法的儀軌という密教的要素が加わったとみなし得る。最初期の密教經典のうち、呉支謙訳『華積陀羅尼神呪經』にも仏塔に向かってダラニを唱えたり、儀軌を修する記述が見られるが<sup>(23)</sup>、いまだ供養法的儀軌は見られず、本經にいたって初めて見られる特徴といえる。『蘇悉地經』『一字仏頂輪王經』など本經の後に成立した經典



になると、一段と仏塔をめぐる密教的な要素が強まっている<sup>(24)</sup>。それ故、本經におけるこの儀軌は、後に確立してくる仏塔をめぐる密教儀礼の転換点を示す特徴が見受けられるのである。

(2)次に、心呪(真言No.4)による「雄黄法」では、隠身・一切諸菩薩や金剛手の見仏・虚空の遊歩という三種悉地が成就されると説かれていた。これと同様の三種悉地は『蘇婆呼童子經』『蘇悉地經』にも見られるので、初期密教共通の悉地成就法であったと思われるが、本經の中では異質の得益といえる。

(3)随心呪(真言No.5)による第三の成就法儀軌では、鬼魅や毘那夜迦、一切諸天や龍などを意のままにし、一切如来に護念されて、不退転となって無上菩提を証すると説かれていた。

(5)第五の入壇儀軌では、灌頂するだけで一切の罪障や前世に生じた業障が浄化され、一切如来に加持されて、菩提道場に達するとされていた。

(7)第七の画像成就法では、如来によって無上正等覚が授記され、不退転となり、さらに母胎の中に生ずることなく、蓮華より化生して菩提道場を究竟するとされていた。

(8)第八の護摩儀軌では、作障者や毘那夜迦が降伏され、一切の災難や罪障がなくなるとされていた。

このように見てくると、(2)「雄黄法」以外の実践法は、その得益から察するに、除災や除障、そして菩提獲得という点を強調していたといえる。もう少しこの得益に関して掘り下げてみると、そこには除災や除障から菩提獲得にいたる一連の流れがあるように思える。これは『蘇婆呼童子經』にも見られる特徴でもあるし<sup>(25)</sup>、また、『大日經』では除一切蓋障三昧より菩提獲得の流れが説かれている<sup>(26)</sup>。この点に着目すると、本經で説かれる除災や除障は単なる現世利益の範疇に留まるのではなく、菩提獲得のための必要条件であったとみなし得る。つまり、本經の制作者たちは、除災や除障があってこそ菩提が獲得されると考えていたのである。

さらに、この除障に関する記述は何も初期密教經典に限って見られる特徴ではなく、初期仏教より大乘經典にいたるまで説かれる業滅(滅罪)の思想<sup>(27)</sup>や、仏塔信仰に基づく仏塔儀礼の中にも見られる<sup>(28)</sup>。それゆえ、除災や除障という初期密教經典に多く見られる特徴も、実はこの初期仏教以来の業滅思想や仏塔信仰が底流にあったと主張したい。あえていうならば、本經の除災や除障は、初期仏教時代より一貫して流れる業滅の思想や仏塔信仰のもとにあったと考える。ただ、それが従来の滅罪の儀礼や、単なる香華供養による仏塔供養や礼拝儀礼に終わるのではなく、密教

的な儀軌や成就法に取って代わられたと考えるのである。

### まとめ（本経に見られる初期密教の特徴）

筆者は最近、初期密教を前期と後期に分けて考えるようになってきたが、本経を読み始めて気付いたことは、本経がその前期と後期を分ける転換点になっているという点である。そして、この前期の中にも大乘仏教のガラニ經典に影響された二つの系統があったと思える点である。それは、ガラニを中心に据えた観点から導き出されるのであるが、一つはガラニによって除災のみを目的とする、いわゆる現世利益中心の多くの經典群である。もう一つは、ガラニによって除災・除障を説くが、ただそれだけではなく最終的に菩提を目指した少数の諸經典である。この後者に属するのが、呉支謙訳『仏説無量門微密持經』類本や、東晋難提訳『請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經』や、本経であったといえる。

そこで、上來検討してきた本経の特徴とその背景を整理してみると、まず実践面では次のようなことがいえるのではないだろうか。

1. 本経の真言ガラニに基づく諸儀軌には、除災や除障を前提とする菩提獲得が強調される特徴があった。その背景には、大乘仏教のガラニ經典による直接的な影響があった。
2. さらに、これを大きな仏教史の流れの中で捉えれば、初期仏教時代より流れる業滅・滅罪の思想やその儀礼の延長線上に位置づけられる。そして、この流れは後代の密教經典へも確実に浸透している。
3. 次に、本経の儀軌の中には仏塔をめぐる供養法的儀軌が行われる特徴があった。これは、従来の仏塔信仰に基づく仏塔供養やその儀礼より展開したものであり、後代の密教經典の儀軌へと継承されている。
4. 一方、本経には画像やマンダラといった視覚的な資具が用いられていた。画像やマンダラには三尊形式が、とくに画像には多面多臂が初めて登場してきたわけであるが、これらの密教的資具は、仏の世界をよりリアルなものにし、そこに参入するための聖なる場を提供するものであったといえる。そして、これらは、後代の密教經典においてより複雑化していくのである。そのうち、本経に見られる画像の源流は『法華經』見宝塔品や、觀仏三昧に影響された礼拝用画像などに求められる。マンダラについても、その源流は『法華經』見宝塔品や仏塔などの欄干に見られる仏陀の説法図あたりに求められると考えてみた。

5. 本経には、従来の初期密教経典には見られない供養法の儀軌と、本経において初めて印契と真言が組み合わされた十七印明に基づく召請儀軌が説かれていた。この二種の儀軌は本経において初めて説かれたものであろうが、それらも後代の初期密教経典に継承されていくものであった。

次に、思想面から見ると次のようなことがいえるのではないだろうか。

6. 本経のような儀軌や成就法を通じて、除障から菩提の獲得が語られる背景には、大乘仏教の仏性思想が介在していた。この点を考慮すれば、思想的には大乘仏教の思想を受け継いで本経の儀軌が理論化されていたといえるし、さらには後代の初期密教経典にも仏性思想と密教儀軌とが結びついて継承されている。

以上、『牟梨曼陀羅呪経』を全体的に捉え、そこに浮かび上がる様々な特徴を検討してみた。これによって、本経が長い初期密教時代を前期と後期に分けるターニングポイントになり得る重要な密教経典であったことが、幾分なりとも確認できたとと思われる。

#### 参考文献

- 伊藤 (2003) = 伊藤堯貫 『蘇悉地経』と『蘇悉地羯羅供養法』『蘇悉地羯羅成就法集』『密教学研究』第35号、2003、pp.1-16。
- 氏家 (1984) = 氏家覚勝 『陀羅尼の世界』東方出版、1984。
- 榎本 (1989) = 榎本文雄 「初期仏教における業の消滅」『日本仏教学会年報』第54号、1989、pp.1-13。
- 大塚 (1998) = 大塚伸夫 「『蘇婆呼童子請問経』における灌頂について」『佐藤隆賢博士古稀記念論文集 仏教教理思想の研究』三喜房仏書林、1998、pp.189-200。
- 大塚 (2001a) = 大塚伸夫 「『蘇婆呼童子請問経』に見られる初期密教修行者像について」『密教研究』第33号、2001、pp.37-74。
- 大塚 (2001b) = 大塚伸夫 「安楽成就法画像儀軌に見られる画像について」『大正大学総合佛教研究所年報』第23号、「Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapāśakalparāja Part IV (『不空羂索神變真言経』梵文写本転写テキストIV)」収載、2001、pp.(3)-(10)。
- 大村 (1918) = 大村西崖 『密教発達志』巻一、1918、pp.143-153。
- 木村 (2001) = 木村秀明 「『不空羂索神變真言経』「パタ造立儀則品」に説かれる補陀洛山図」『豊山学報』第44号、2001、pp.(1)-(34)。
- 定金 (1994) = 定金計次 「インド仏教絵画の展開—壁画の変転と礼拝画の成立—」『佛教藝術』第214号、1994、pp.75-131。
- 下田 (1997) = 下田正弘 『涅槃経の研究』春秋社、1997。
- 高田 (2000) = 高田順仁 「『牟梨曼陀羅呪経』所説のマンダラ」『密教図像』第19号、2000、pp.1-17。
- 高田 (1977) = 高田仁覚 「勝菩提造『蘇悉地羯羅成就法集』の研究」『高野山大学論叢』第12巻、

1977、pp.23-47。

高田(1978) = 高田仁覚『インド・チベット真言密教の研究』密教学術振興会、1978。

梅尾(1982a) = 梅尾祥雲『曼荼羅の研究』密教文化研究所、1982(再版)、p.472。

梅尾(1982b) = 梅尾祥雲『秘密事相の研究』密教文化研究所、1982(再版)、p.8、11。

积舎(1973) = 积舎幸紀「滅罪に関する研究ノート(一)～(三)」『三蔵』第80～82号、大東出版社、1973。

袴谷(1992) = 袴谷憲昭「悪業払拭の儀式関連経典雑考(Ⅰ)～(Ⅵ)」(Ⅰ)『駒沢大学仏教学部研究紀要』第50号、1992、pp.(1)-(28)、(Ⅱ)『駒沢大学仏教学部論集』第23号、1992、pp.(15)-(34)、(Ⅲ)『駒沢大学仏教学部研究紀要』第51号、1993、pp.(1)-(40)、(Ⅳ)『駒沢大学仏教学部論集』第24号、1993、pp.(37)-(58)、(Ⅴ)『駒沢短期大学研究紀要』第23号、1995、pp.95-127、(Ⅵ)『駒沢短期大学研究紀要』第24号、1996、pp.67-91。

羽田野(1988) = 羽田野伯猷『チベット・インド学集成』第四巻、法蔵館、1988、pp.122-136。

平岡(1992) = 平岡聡『『ディヴィヤ・アヴァダーナ』に見られる業の消滅』『仏教研究』第21号、1992、pp.113-132。

平川(1990) = 平川彰『平川彰著作集第七巻 浄土思想と大乘戒』春秋社、1990、pp.440-445。

福田(1990) = 福田亮成「『牟梨曼陀羅呪経』所説のマンダラ」『智山学報』第39輯、1990、pp.29-44。

『梵語仏典』 = 塚本・松長・磯田編著『梵語仏典の研究Ⅳ 密教経典篇』平楽寺書店、1989、pp.68-69。

松長(1981) = 松長有慶『密教経典成立史論』法蔵館、1981(再版)、p.119、137。

松村(1983a) = 松村恒「ギルギット所伝の密教図像文献」『密教図像』第2号、1983、pp.71-79。

松村(1983b) = 松村恒「ギルギット写本備忘録」『印度学仏教学研究』第31-2号、1983、p.852。

松村(1983c) = 松村恒「古代北インドの仏教儀礼」『宗教研究』第255号、1983、pp.227-228。

宮治(1994) = 宮治昭「インドの仏伝美術の三類型」『仏教芸術』第217号、pp.15-32。

## 注

(1) 『大唐内典録』(大正vol. 55, 229a17-b28)

(2) 『出三蔵記』(大正vol. 55, 6c24-7a24)

(3) 『開元釋教録』(大正vol. 55, 539a11-b4)

(4) 松村(1983a) pp.71-79、松村(1983b) p.852。

(5) 松長(1981) p.119。

(6) 大村(1918) pp.143-153。梅尾(1982a) p.472。梅尾(1982b) p.8、11。松長(1981) p.119、137。松村(1983a) pp.71-79。松村(1983b) p.852。『梵語仏典』pp.68-69。福田(1990) pp.29-44。高田(2000) pp.1-17。

(7) この『牟梨曼陀羅呪経』という経題は、上述したとおり、経典の最初の部分が欠けているので、経録に収載するおりに、本経に記され始まる「牟梨曼陀羅」なる語をとって、これを経題にしたと考えられる。この「牟梨曼陀羅」は、対応する類本を見ると、②本「根本呪」、③本「根本陀羅尼」、④本「rtsa ba'i rig snags」と呼ばれている。したがって、マンダラを

意味するものではなく、本經のテーマとなる〈大宝広大樓閣善住秘密ガラニ〉の名前であったといえる。

- (8) この真言No.4は、今日の真言宗では仏壇開眼の際に「宝樓閣印明」として唱えられる。
- (9) この第一の儀軌「根本呪儀軌」は、今日の真言宗では③不空訳本に基づく宝樓閣曼荼羅を用いて修される「宝樓閣法」と呼ばれる。主に滅罪を中心とするが、息災・増益にも修される。
- (10) 『牟梨曼陀羅呪經』「日別遶塔及曼陀羅。行道一匝誦其一遍。如是満足一百八遍已。(大正 vol.19, 657c21-22)」
- (11) 詳細は大塚(2001a) p.56参照。
- (12) 詳細は大塚(1998) 参照。
- (13) 四支念誦の詳細は、高田(1977)、高田(1978) pp.77-85、伊藤(2003) 参照。
- (14) ①『牟梨曼陀羅呪經』「復次當知其諸物等應入壇者香花飲食旺子衣服。乃至灰土水火一切等物。皆以此呪呪水灑上。然始將入。若請佛請神及四天王安於座上。一一皆當以其身印本呪請而安之。」(668a8-11)

②菩提流志訳(a)明本「爾時世尊爲諸大衆說手印呪法。佛言應於佛壇中作四佛心印呪。復作四聖金剛心印呪以此二印啓請諸佛。勿用腹印」(651c15-17)

- (15) 梵本『不空羂索神變真言經』(密教聖典研究会編『不空羂索神變真言經梵文写本影印版』大正大学総合仏教研究所、1997)における「仏性」の用語に関しては、「金剛手よ、汝は正しい。金剛手よ、この[出世間儀軌]はすべてのジャンプー洲の有情にとって、父と母になったものであり、それがガラニ・マンガラである。またそれが、観自在摩訶薩であり、一切有情たちの願望・保護・帰依所・避難所・世間・出世間のものであり、乃至、女性・男性・少年・少女の一切有情たちの仏性を自身に確立させるのである (yāvan sarvasattvā [nāṃ] stripuruṣadāraḥ kadārikā [nāṃ] buddhatvam ātma [ni] pratiṣṭhāpayati)。このように力と勇猛さと勢力ある聖観自在菩薩が、過去の有情たちを利益するために果たされたのである。」と仰せになられた。(Ms. 77b5-7, D. No.686, 150a1-3, Ch. 298a27-b2)』

また、「如来蔵」の用語に関しては、「この[不空羂索心真言]を憶念することを修習し、憶持するだけで、一切の世間と出世間との功德と繁栄を獲得し、不退転なる者になる、といわれる。不退転処に安住し、一切如来に護念され、授記され、加持されるであろう。ましてや[マンガラを]拝見し、[真言を]唱え、諷誦し、聖[不空羂索]観自在を拝見し、礼拝し、供養し、憶念し、三時に[不空羂索観音を]明瞭に作意して供養し、帰依するならばなおさらである。その者は私に等しいと知るべきである。観自在の身体として加持された者と知るべきである。一切如来の加持によって加持され、授記によって授記されたことと知るべきである。ましてや、誰かさらに多く努力するならば、なおさらのことである。その者は如来を蔵する者であると知るべきである (sa sattva [s] thatāgatagarbho veditavyam)。」と。「私もまた、不断に常に守護するであろうし、いかなる時でも姿を現し、すべての願望と欲求を満たすであろう。その時、私は一切有情が非常に素早く菩提道場に至り、大法輪を転ずることに住せしめるであろう。(tadāhaṃ sarvasattvaḥ śighraśighrataraṃ bodhimaṇḍalagataṃ mahādharmacakrapravartanaṃ sthāpayisyāmi)」と。(Ms. 76a7-b2, D. No.686, 144b2-7, Ch. 296c 16-25)』

- (16) 『蘇婆呼童子経』「貪欲などの煩惱の集まりを有する心が輪廻するものであるといわれる。[その] 煩惱から解脱することが、[本来] 水晶や月に等しい [心を有する] 者の生死の苦海の最後であると説かれたのである。喩えば、無垢なる水が塵の集まりによってたちまち再び濁ってしまうように、そのように [本来] 清浄で無垢なる心が貪欲などの汚れによって濁るのである。(D. No.805, Wa 121b1-3)」
- (17) 『蘇婆呼童子経』(D. No.805, Wa 126b2-127a2) 長文のため引用を省略する。
- (18) 『瑜伽師地論』四十五卷、大正vol.30, 542c16-543a24。
- (19) 『大吉義神呪経』大正vol.21, 579b1-14。
- (20) 観仏三昧を説くその他の經典としては、四世紀ころに漢訳された『観仏三昧海経』(大正vol.15, 690c)、五世紀ころに漢訳された『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』(大正vol.20, No.1043)、『観虚空蔵菩薩経』(大正vol.13, No.409)、『観普賢経』(大正vol.9, No.277)、『観弥勒経』(大正vol.14, No.452)、『観無量寿仏経』(大正vol.12, No.365)、『観藥王藥上二菩薩経』(大正vol.20, No.1161)などを挙げるができる。
- (21) 『蘇婆呼童子経』「日中に [上説のような適所を] 堅固になし、泥で [その地の] 表面を塗るべきである。東方、あるいは北方、あるいは西方に門を向け、南方には決して門を向けてはならない。その香殿 (dri gtsaṅ khañ, gandhakuṭi) の一方(東方)に最勝なる勝者の道を示した布の身像(画像)を安置するために堅固に取り付けるべきである。あるいはまた、妙なる木像を供養するために安置すべきである。(D. No.805, Wa 120a2-4)」
- (22) 大塚 (2001b) pp.(6)-(8)、木村 (2001) pp.(3)-(25)。
- (23) 『仏説華積陀羅尼神呪経』大正vol.21, 875a3-27。
- (24) 『蘇悉地経』大正vol.18, 633b2-10、『一字仏頂輪王経』大正vol.19, 236c20-237a4。
- (25) 『蘇婆呼童子経』「安楽となった身体 [を有する者] は、一点に心を集中して入定するのであるが、その時、真言持誦に対して障礙するものがなくなるのである。他の生のうちどの [生] においても為されたすべての罪障が真言を持誦することによって現れるが、持誦者は [その] すべての罪障を浄化して、清らかとなった心で悉地を獲得するのである。(D. No.805, Wa 126b5-6)」
- (26) 『大日経』大正vol.18, 1c28-2a6。
- (27) 釈舎 (1973)、榎本 (1989)、平川 (1990)、平岡 (1992)、袴谷 (1992) を参照。
- (28) 下田 (1997) pp.90-151、羽田野 (1988) pp.124-132を参照。

本稿は、平成14年9月10日、高野山大学密教文化研究所にて開催された研究会で発表させていただいた内容に手を入れたものです。発表時には高野山大学の諸先生より多くのご教授を賜りました。ここに感謝の意を表します。

<キーワード> 初期密教・ダラニ・印契・マンダラ・画像・儀軌・除災・除障・菩提